問題訂正

国語（国語総合（近代以降の文章）・現代文Ｂ）

第三問

18ページ7行目

（誤）　対応

（正）　応対

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

身体で覚えるものはたくさんあるが、知覚や感覚もそのひとつである。知覚や感覚はひょっとすると、私たちに生まれつき備わった能力だと思われているかもしれない。たとえば、オギャーと泣いて生まれた瞬間から、眼をあければ、人の顔や部屋の天井が見えるし、いろいろな足音や話し声が聞こえるように思われるかもしれない。それらがいったい何なのか、どんな意味をもつのかはわからないとしても、顔は顔に見えるし、足音は足音に聞こえる。知覚される世界、感覚される世界は、赤ん坊でも大人とたいして変わらない。こう思われるかもしれない。しかし、じっさいは①そんなことはないのだ。

知覚や感覚もまた、私たちが世界から刺激を受け、それに応じて身体を動かすという経験を積んでいくなかで、次第に習得されるものである。そのような世界との交わりの経験がなければ、世界はただの混沌として立ち現れるだけで、顔、天井、足音、話し声などに明確に区別されて立ち現れることはない。それぞれの事物が互いに明確に区別されることを「分節化」と言うが、身体による世界との交わりがなければ、世界は分節化されて立ち現れてこないのである。

②モリヌークス問題という興味深い問題がある。これは、生まれつき眼の見えない人が開眼手術を受けて眼が見えるようになったとき、その人は立方体と球を眼で見ただけで、どちらがどちらであるかを正しく言い当てることができるだろうか、というものである。この人はもちろん、触覚によって「立方体」と「球」という言葉を習得したので、手で触れれば、どちらが立方体で、どちらが球かを正しく述べることができる。しかし、手で触れずに、眼で見るだけで、どちらがどちらなのかを正しく言い当てることができるだろうか。

パッと聞くと変な問いに感じられるかもしれないが、この問題は人の知覚の成り立ちを考えるうえで、とても重要な視点を与えてくれる。なぜなら、この問題の背後には、ひとつの重大な前提があるからだ。それは、開眼手術を受けた人がはじめて眼を開いて立方体と球を見たとき、立方体はすでに立方体に見え、球はすでに球に見えるという前提である。

この前提のもとでは、モリヌークス問題への答えは「ノー」であるように思われる。なぜなら、立方体が立方体に見え、球が球

に見えても、その立方体と球の視覚的な現れ(見え姿)はそれらの触覚的な現れ(手触り)とは明らかに異なるので、どちらが立方体で、どちらが球かを、触覚によって正しく述べることができても、視覚によって正しく述べることはできないように思われるからである。

しかし、じっさいは、③その前提が成り立たない。開眼手術を受けた人が眼を開いても、すぐには何も見えないのである。眼のまえに広がるのはまったくの混沌である。ふつうの人でも強烈な光を浴びると、まぶしくて、ほとんど何も見えなくなる。それと似て、開眼手術を受けた人の場合も、最初は光のウズ[a]が眼前に広がるだけである。そこから時がたつと、やがて立方体が立方体に見え、球が球に見えるようになる。しかし、そのためには、立方体や球から光の刺激を受け、それに応じて身体(頭や眼球など)を動かすという経験を積まなければならない。そのような経験のなかには、身体の動きを触覚的に感受することも含まれている。つまり、立方体と球の視覚経験のなかには、触覚経験が入りこんでいるのである。

そのため、立方体が立方体に見え、球が球に見えるようになったときには、立方体と球の視覚的な現れから、どちらが立方体で、どちらが球かを言い当てることができるかもしれない。なぜなら、それらの視覚経験に入りこんだ触覚経験が、立方体と球の触覚的な現れと何らかのつながりがあるかもしれないからである。このようなつながりがあれば、立方体と球の視覚的な現れをそれらの触覚的な現れと関係づけることができるかもしれず、そうなると、視覚的な現れから、どちらが立方体で、どちらが球かを言い当てることができるようになるだろう。

④モリヌークス問題は、すぐ決着がつきそうにみえて、なかなか決着がつかない。それは、開眼手術を受けても、すぐには事物が見えないからである。事物が見えるようになるには、刺激に応じて身体を動かすという経験(触覚経験を含む経験)の積み重ねが必要である。ここでは、モリヌークス問題への答えがどうなるかにはこだわらないで、この点を指摘するにとどめたい。

この点はまた、⑤上下逆さメガネを掛け続けたときに起こる感覚の変容からもよく示される。上下逆さメガネを掛けると、すべてのものが文字どおり上下逆さに見える。天井は下に見え、床は上に見える。このように視覚が大きく変化するので、すぐにはそれまでのように自由に動くことができない。それでもそのメガネをかけたまま、ともかく身体をいろいろ動かすという経験を

積んでいくと、一週間ほどで、もとのように自由に動けるようになる。そしてそのときには、何と上下逆さまではなく、すべてが正立して見えるようになる。自由に動けることと正立して見えることは同時に成立するのである。

こうした視覚の変化が生じる途中の過程で、じつに興味深い現象が起こる。逆さから正立への変化は一瞬で切り替わるわけではない。そのあいだに、あるものは逆さに、あるものは正立して見えたり、さらに物事がもっと解体して混沌に近いジョウタイ[b]に見えたりする段階がある。そのような恐ろしい無秩序の段階を経て、ようやくすべてが正立して見える秩序だった段階が訪れるのである。しかし、そうなっても、安心するのはまだ早い。逆さメガネを外すと、またすべてが逆さに見える。メガネを着けないもとの生活に戻るには、もう一度、あの恐ろしい無秩序の段階をくぐりぬけなくてはならないのだ。

エナクティヴィズムという考え方がある。それは、事物が事物として知覚できるようになるためには、身体を動かして事物からうまく刺激を探り出すことが必要だという考え方である。机が机に見え、雨音が雨音に聞こえるという［⑥］された知覚が成立するためには、それらの事物から受ける刺激に応じて身体（とくに眼や耳などの感覚器官）を適切に動かして、それらの事物から新たな刺激を探り出し、その新たな刺激に応じてまた身体を適切に動かすということを繰り返していく必要がある。

このような「刺激の探り出し」を適切に行う能力は「感覚－運動スキル」とよばれる。私たちは事物との交わりを通じてこの感覚－運動スキルを習得する。そしてこのスキルを用いて事物から刺激を適切に探り出すことによって、［⑥］された知覚を得るのである。何が描かれているのかがよくわからない図をしばらくあれこれ眺めていると、パッとあるもの（たとえば、髭（ひげ）をはやした男）が見えてくることがある。そしていったんそれが見えるようになると、つぎはすぐそれを見ることができる。しばらく眺めているあいだに、それを見るための感覚－運動スキルを習得したのである。

ソムリエや指揮者は常人にはソウゾウ[c]もできないようなセンサイ[d]な味覚や音感をもっている。ソムリエはワインの味を、そのワインの産地や何年ものかなど、驚くべき詳細さと正確さで識別できる。交響曲の指揮者も、ボウダイ[e]な数の音の響き合いのなかから、それぞれの音を正確に聞き分けることができる。この人たちのほかにも、たとえば、天文学者は夜空に超新星を見ることができるし、医師はレントゲン写真に病巣を見ることができる。⑦このような驚嘆すべき知覚能力も、長年の経験によって培わ

れた感覚－運動スキルによって可能になるのである。

（信原幸弘（のぶはらゆきひろ）『「覚える」と「わかる」　知の仕組みとその可能性』による）

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字で書け。

問二　傍線部①に「そんなことはない」とある。筆者はどのようなことを否定しているのか。簡潔に説明せよ。

問三　傍線部②「モリヌークス問題」とはどのような問題か。条件を明確にして説明せよ。

問四　傍線部③に「その前提が成り立たない」とある。

1　「その前提」とはどのような前提か。その前提が書かれている一文の最初と最後の五字を答えよ（句読点を含む）。

2　「その前提が成り立たない」とはどういうことか。理由とともに、説明せよ。

問五　傍線部④に「モリヌークス問題は、すぐ決着がつきそうにみえて、なかなか決着がつかない」とある。モリヌークス問題に対して「イエス」と答える可能性があるのはなぜか。説明せよ。

問六　傍線部⑤に「上下逆さメガネを掛け続けたときに起こる感覚の変容」とある。どのような「変容」が起こるのか。変容の順序に沿って説明せよ。

問七　⑥ に当てはまる最も適切な語を、本文の前半部分から五字以内で抜き出して答えよ。

問八　傍線部⑦に「このような驚嘆すべき知覚能力も、長年の経験によって培われた感覚-運動スキルによって可能になるのである」とある。「驚嘆すべき知覚能力」は、どのようにして得られるのか。交響曲の指揮者の例に沿って、「刺激」という語を用いて説明せよ。

第二問　次の文章は高井有一『少年たちの戦場』の一節である。昭和二十年の一月に欅村月舟寺に鷹杜学園初等部の子どもたちが疎開をしてきた。引率教員の五代と当時小学校五年生の氷川らは、慣れない疎開先で東京の空襲の報を聞き、戦局の悪化による不安な気持ちを抱えていた。以下は昭和二十年七月のいよいよ日本の敗色が濃厚となってきた時期の出来事を描いた場面である。この文章を読んで後の問いに答えよ。

欅村に夏が来たのは七月の初めである。この年、梅雨は短かった。細かい霖雨の降り続ける日、月舟寺の本堂は暗い。朝から黄色い電灯を点し、床を上げた後の畳には生温かい湿気が滲んで、虱に喰われた肌は、鬱陶しく汗ばんだ。そのため、朝から杉の梢を通して容赦なく照りつける夏の光が、生徒たちを殊更に歓ばせた。縁には、長く干せなかった夜具が一斉に並んだ。

農家へ①勤労奉仕に行く事が決められたのは梅雨が明けて間もない頃である。寺へ食糧を提供する代償として、村長が要求したのだという噂であった。

村長の家は、古墳の近くにある。防風林に囲まれた広い庭に整列した氷川たちの周りを、鶏がけたたましく啼いて駈け廻った。村長の他に、三人の野良着を着た男がいた。彼等はひどく年寄りのように見えた。

「今日は、この人たちの畑の仕事を手伝って貰います。手伝うたって、草取りだけだがね。まあ、応召で若い者の手が足りない所だから、一所懸命やって下さい。あんた方のためにもなる仕事なんだから」

男たちが笑った。少しばかりの仕事をさせ、お前たちを食わせてやるのだと思っていたに違いない。

全員が三班に別れ、それぞれの畑に向かった。氷川が連れて行かれたのは、村の防空群長をやっている江口の畑である。

「この辺りは全部、わしの畑だ」

と、遠く緑の濃い川の堤の下まで広がった土地を指して彼は言った。

「暑くなると、雑草という奴は一度に出て来るものでね。地味が肥えていりゃあ、雑草も勢いがいいってわけだ。はかは行かんでもいいから叮嚀にやって下さい」

高く澄んだ蒼い空のあちこちに、銀色の雲が輝いていた。氷川は、最近は暫く敵機の飛ぶのを見ないと思いながら、陽に背を向けて陸稲の中に蹲んだ。灼けた土が指先に熱く、草いきれが匂って来た。振り返って見る月舟寺の森の木は、風に揺れているように見えたが、涼しさは畝にまでは届かなかった。忽ち汗に濡れて、氷川は、その朝五代の言った言葉を、何度も辛い思いで反芻していた。

「これから、火曜と水曜は、朝二時間だけ授業、あとは勤労奉仕という事にします。判ってるだろうが、銃後も戦場だからね。辛くても増産のお役に立たなくちゃいけない。ほら、この間来た草村君も、今では学生も産業戦士も区別はないって言っていたね。彼のように体を壊してしまっては困るが、君たちも少々苦しいのは我慢しなくてはいけないよ」

草村保治は、高等学校の学生で、初等部の時に五代の組にいたのである。雨の中を傘もささずに、彼が月舟寺を訪ねて来たのは、まだ梅雨のうちであった。ゲートルは巻いていたものの、つぎの当たった帽子を被り、腰に手拭いを下げる高校生の風俗を、彼はそのまま守っていた。

暫く職員室で話していたのち、五代が彼を紹介した。草村は胸に影が出て、動員されていた工場から休みを取り、郷里へ帰る所だそうであった。

「みんな、工場の話でも聞いたらいい。君たちもやがては経験するんだから」

「工場と言ったってね、国民学校の雨天体操場を借りているんだよ。其処で飛行機の部品を作ってるんだ」

草村は、細い脚を胸に抱えるように坐って話し始めた。腰の手拭いは、雨と汗に薄黒く汚れていた。

「朝から晩まで、金属のかけらをいじくり廻して、まるで工員、いや、今は産業戦士というのか、あれと同じだよ。②そして出来上がった部品は、飛行機の何処に使われるのか、判らないんだ。神経ばかり使う単調な仕事でね、正直なところ、動員がこんなに辛いものとは思わなかったな」

彼は生徒たちを見廻した。瞼から頬にかけて、皮膚が鉛色に濁っていた。

A「初めは、皆、動員に行くのを歓んだんだよ。教練なんかよりいいと思ったし、何より食糧の特配があるからね。それが今で

は、俺みたいに、体を壊した奴が羨ましがられる始末になってる。勉強だけしていればいい生活がどんなに楽なものか、思い知らされたっていうわけさ。君たちの中にも、勉強が好きな奴はあんまりいないだろうけど、工場なんかへ行ってると、猛烈に勉強したくなるよ。およそ怠けてた奴まで、寮へ帰ってから遅くまで本を読むようになってくる。可笑しなものだね。俺が胸悪くしたのも、結局はそうやって無理をしたせいだろうけど、B まあ、勉強する楽しさを知ったのが、勤労動員の唯一の収穫かな」

彼は五代の方を顧みた。

「先生、ぼく、今度田舎へ帰ったら、うんと勉強しますよ。読みたい本が一杯ありますしね。病気のお蔭で自由になれたんだから、その自由を活用しなくてはね」

「でも、焦っても仕方がないよ。田舎では何にも考えないで、ぼんやり静養した方がいいんじゃないのか。君、まだ先は長いよ」

「そうかなあ」

草村は苦く笑った。

「そうかも知れませんね。ただ、そんな落ち着いた気持ちになれるかどうだか」

それきりで、誰も黙ってしまった。気詰まりな静けさが長く続いたのち、力なくさまようような草村の眼が、部屋の隅に転がっていたボールに行き当たった。

「あ、あのボール、使えるね」

彼は立ち上がってボールを取り、掌の上で何度も弾ませてみた。

「これはいいや。俺、前に蹴球の選手をやった事があるんだ」

外にはまだ細かい雨が降っていたが、草村は気にも留めない風で、山門の近くまで走って行って跣になり、本堂の屋根をめがけてボールを蹴った。鈍い音を残してボールは飛び、激しく瓦に当たって弾んだ。彼は落ちて来るボールを受け止め、再び蹴った。今度はボールは屋根を斜めに横切って、庫裡の方にまで飛んだ。

「あ、いけねえ」

ボールを追って草村は走った。前のめりの真剣な走り方であった。少年たちは、縁に並んだまま動かず、その狂気染みた仕種に見とれていた。

「草村はね」

五代が独り言のように言うのが聞こえた。

「ぼくの教えていた頃は、実に神経の細かい、頭の鋭い子だったんだよ。今でも、その面影は残ってるだろう。それだけに、病気になって、ぽっきり折れてしまわないかと心配だな。うまく立ち直って呉れればいいんだけども」

その傷ましそうな五代の声とともに、唇を引きつらせて雨の中でボールを追った草村の表情を、氷川は忘れられなかった。産業戦士と同じ仕事を強いられ、体を痛めつけられてしまった男の苦しみと苛立たしさが、五代の言葉通り判るような気がした。③そしてその苦しみは、今の時代が齎したものであり、自分とも決して無縁ではない事にも、気附きかけていたのである。甘やかされ、庇護されるのに馴れて育って来た少年の前に、初めて「時代」がその抗い難い姿を見せつつあったとも言える。

陽はいささかも翳る気配がなく、二の腕まで汗と泥に塗れた。作業は捗らなかった。

「おい、お前たち、駄目だ。其方へ行っちゃいかん」

江口が不意に呶鳴った。見ると、彼はトマトや茄子のある野菜畑の方へ、齢に似合わぬ敏捷さで走り寄って行く所であった。彼は、恰度、鶏を追うように、其処にいた三人の生徒を追い立てた。

「おお危ねえ、油断も隙もないね。生り物の畑なんぞに入られたら、何されるか判ったもんじゃない」

聞えよがしに彼は言った。野菜畑には、まだ色づきもしない小さなトマトの実が生っている。江口は、それを生徒に盗まれはしまいかと惧れたのであろう。それからも、野菜畑の傍らに立って、生徒が近附くのを執拗に監視していた。

三時半の終了まで、時は鈍かった。終わって再び村長の家の庭に集まった時、誰の肌も赤くただれていた。

「やあ、みんな逞しくなったな。これで十日も経てば、立派な百姓の色になりますよ」

④と村長は言った。氷川は、その満足そうな笑顔を、叫び出したくなるような憎しみを抱いて瞶めた。こいつも江口も皆同類だ、

弱味につけ込んで、さんざんこき使おうとしているんだ、と彼は思った。

帰りの道で列は乱れたが、五代もそれを咎めず、離れて一人で歩いた。井戸で水を浴びた肌にも、忽ち新しく汗が噴き出た。

「ほうら、これ戦利品だぞ」

杉原がポケットから取り出したものを、ボールのように高く投げ上げた。トマトであった。

「あの土百姓、俺たちに疑いかけやがったからな。帰りにもいで来てやったんだ」

彼はトマトを三つ持っていた。

「うまくやったな。一つ寄越せよ」

曽根が手を出して取り上げ、直ぐにかぶりついた。

「ちぇっ、うまかねえや」

それでも彼は、それを食べてしまった。

「お百姓さん、御馳走さまあ」

杉原がまた⑤投げ上げ、受け損ねたトマトが、氷川の足許に転がって来た。氷川はそれを拾って口に入れた。熟し切らぬ実には、青臭さとともに、陽の熱さが染み込んでいた。

「おっ、こいつ、要領いいな」

杉原は、氷川の手から、喰いかけの半分を奪い返して頬張った。

「この次はもっと盛大にやろうぜ」

騒がしさに気附いた五代が、足を留めて振り返った。杉原は首をすくめ、曽根の蔭に隠れたが、氷川は逆に、胸を張るように気負って五代を見た。五代が叱るなら、先刻感じた土地の人間の横暴を、総て言い立ててやろうと思ったのである。しかし、五代は、静かに視線を逸らし、再び歩き始めた。

その夜、氷川は食欲がなかった。馬鈴薯を皮つきのままで炊き込んだ飯が、舌に粗く味気なく感じられ、彼は半ば以上を残し

て、

「君、食べろよ」

と隣の三ツ池に丼を押しやった。

注　防空群長……戦時中に行われた防空上の自助組織である家庭防空群の長。行政機関などへの連絡役などを担っていた。

産業戦士……戦時中、戦意発揚と労働力の動員のため労働者を兵士と同格のものとして扱うために使われた呼称。

特配……戦時中に特別に行われた食料の配給。

問一　傍線部①「勤労奉仕」についての村長と五代の考え方をそれぞれ説明せよ。

問二　傍線部②に「そして出来上がった部品は、飛行機の何処に使われるのか、判らないんだ」とある。この草村の発言は、動員のどのような側面を表したものか。説明せよ。

問三　二重傍線部Aに「初めは、皆、動員に行くのを歓んだんだよ」、二重傍線部Bに「まあ、勉強する楽しさを知ったのが、勤労動員の唯一の収穫かな」とある。ここには動員に対する草村の考え方の変化がうかがわれる。その変化が生じた理由を説明せよ。

問四　傍線部③に「そしてその苦しみは、今の時代が齎したものであり、自分とも決して無縁ではない事にも、気附きかけていたのである」とある。ここで少年たちは何に「気附きかけていた」と考えられるか。説明せよ。

問五　傍線部④に「氷川は、その満足そうな笑顔を、叫び出したくなるような憎しみを抱いて瞶めた」とあるが、なぜ「叫び出したくなるような憎しみ」を抱いたか。説明せよ。

問六　傍線部⑤に「投げ上げ、受け損ねたトマト」は少年たちのどのような面を象徴しているか。一連の「トマト」についての描写をふまえて説明せよ。

第三問　次の文章は、小説家による随筆である。これを読んで、後の問いに答えよ。

わが家は川沿いの町にある。大川に流れこむ水のほとりである。

町には運河とも掘割ともつかない大小の支流が入り乱れているので、暇にまかせて町を散歩する私の足もとにはいつも微かながら水の音がつきまとうことになる。

その石垣は堤防の一部である。流れに面した方は最近、新しく護岸工事がほどこされたが、道路がわはそっくり残されている。灰色がかった緑の苔むした安山岩で、いい色をしている。かなり昔に築かれた石垣と見えて、不揃いの石を重ねた積み方にも長い歳月のあとが現れている。川下にある静かな町の一角である。このあたりはかつて漁師町であった。

かといって石垣はわが家の近くにあり、ふだん散歩をする道筋に面しているから、とりたてて珍しいわけではない。ただの石垣である。しかし、私の目は自然に惹きつけられる。そこに崩れ残った石垣を見出すと、心がなごむ。ほっとする。

とりわけ雨あがりの午後、にわかに日が射すと濡れた苔が金色に輝くときがあって、思わず立ちどまってしまう。私の町でも古い家がとりこわされ新建材の家がたち、川も埋め立てられて駐車場に変わることが多い。

そういう情景に出くわすと何となくこの石垣のことを思い出す。まだ大丈夫、と思ってしまう。何が大丈夫なのかは自分でもよく分からないが、①年経た石垣が示す歳月の痕は私には一つの拠り所となっている。

石垣の前に小さな八百屋がある。タバコ屋をかねている。塩も売っている。野菜果物も豊富にとりそろえてあるし、缶詰類、コーラ、ジュース、みそ、しょう油の他にちり紙、マッチ、煎餅、ヨーカン等もある。野菜の横に赤貝やカキが並べてあることもある。ひところはノートや鉛筆もあった。メザシや塩サバも土間に置かれた木箱に入れてある。近隣の野良ネコどもがすきあらばくわえて逃げようと店先をうろついている。その日のおこづかいである銅貨を握りしめて、子供たちがばたばたと駆けて行き、おやつを物色しているのは毎日の情景である。「どれにしようかな」。軒の低い小さな八百屋である。

間口がせまく、奥行きもそう深くないので、野菜や果物などが高々と積まれると、豊饒そのものであるかのごとき食物が

ぎっしりと充満して、みるからにたのもしい感じである。町の八百屋はこうでなくてはならない。町の住民どころか全人類の胃を賄(まかな)えそうだ。

朝は早いし夜もおそくまであいている。私が散歩に出かけるときは、店のおばさんはお出かけですか、と声をかけてくれる。勤めを持たない私はどこにも出かけるのではない。そういわれると、どこかに目的地があって出かけるような気になってくる。恐縮するいっぽう、②いい仕事をしなければ、と思う。

帰って来るとおばさんはお帰りなさいという。こういう店がすくなくなった。昔は一つの町に必ず一軒はあったものだ。日に日に町々から姿を消してゆくようだ。去年、私は夏から秋にかけて有明海(ありあけ)周辺の土地を探訪したが、どんなに辺ぴな田舎へ行ってもスーパーマーケットばかりで、そのスーパーが申し合わせたようにけばけばしい原色のペンキを塗りたくった安手な造りなのだった。どの店にも店内には流行歌が流れ、棚にはパックした食品が並べてあり退屈そうな顔付きの従業員がレジの前にいる。スーパー形式にしなければ人件費や諸経費の上がった当今、食品店は採算がとれないのである。そしてスーパーは台所に直結する品物を売る所であるのに生活のにおいがない。

早朝、私が散歩がてらにのぞくと、八百屋のおばさんは大根を洗ったり、白菜の山を見合いよく積み上げたりしている。すがすがしい思いを味わう。③たしかに生活がここにはあると感じられる。いずれそのうちにはスーパーとの競争に敗れて店をとざすことになるとしても今はあるじが甲斐(かい)がいしく店を切り回していて商売は繁盛しているように見える。B まだ大丈夫、と私は秘(ひそ)かにつぶやくのだ。

じっとみつめているとホウレンソウの束からは光が射している。ホウレンソウに限らず磨かれたリンゴもカキもキャベツも、軒下にうずたかく積まれたありとあらゆる野菜果物類が透明な光を放つように見えてくる。生命の光である。冬は六時といえばもう夜である。④明りをともしたその八百屋のながめがまたいい。下町のこととて両隣は暗い。界隈(かいわい)は戸をしめてひっそりと静まりかえっている。

電球に照らされた果実が缶詰のラベルが目もまばゆいばかりに輝く。せまい店内に赤や緑が氾濫し、光の波は道路にまであふ

れ出す。暗い道を抜けてこの八百屋へさしかかると、まぶしさに目を細めてしまう。ちっぽけな店がまるで豪華なオペラの舞台に一変したかのようだ。

ところが朝になっても野菜や果物の輝きは薄れはしない。ここに至って初めて私は気づく。夜、この店の果実類が照りわたっているのは、電球の光を反射しているだけではなくて、⑤もともとこれらの果実には核に当たる所に一つの光源があり、そこから透明な光が滲(にじ)み出ているのだ。

昼どきともなれば近所のかみさん達がおかずを買いに三々五々つめかけてくる。店は立錐(りっすい)の余地もなくなる。野良ネコがどさくさまぎれにえさを手に入れるのはこのときだ。店のあるじは客の対応で忙しく土間の魚箱まで見張るわけにはゆかない。一匹の野良ネコが干魚(ひうお)をくわえてとび出して来る。その後から数匹の野良ネコが駆け出す。獲物をくわえた先頭のネコ、それはよく見ればわが家の三毛だ。

（野呂邦暢(のろくにのぶ)「川沿いの町で」による）

問一　傍線部①に「年経た石垣が示す歳月の痕は私には一つの拠り所となっている」とある。

1　「年経た石垣が示す歳月の痕」の具体例を文章中から三つ抜き出して書け。

2　「年経た石垣が示す歳月の痕」を「一つの拠り所」としている筆者の心情が端的に表れている部分を、文章中から十五字以内で抜き出して書け（句読点を含む）。

問二　傍線部②に「いい仕事をしなければ」とある。筆者はなぜそのように思うのか。説明せよ。

問三　傍線部③「たしかに生活がここにはある」とはどういうことか。文章中での対比をふまえながら説明せよ。

問四　傍線部④に「明りをともしたその八百屋のながめがまたいい」とある。筆者は八百屋のどのような様子を「またいい」と言っているのか。八百屋の朝や昼の様子と比べながら説明せよ。

問五　傍線部⑤に「もともとこれらの果実には核に当たる所に一つの光源があり、そこから透明な光が滲み出ているのだ」とある。筆者が「光源」を感じている例を、石垣に関する記述部分から十字以内で抜き出して書け（句読点を含む）。

問六　二重傍線部A及びBに「まだ大丈夫」とある。AとBを通して筆者はなぜ「まだ大丈夫」と感じたのか。六十字以内で説明せよ（句読点を含む）。